



兵庫県立歴史博物館特別展「首里城と琉球王国」を 観覧して（＜時評・書評・展示評＞）

森元，純一

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 16:73-78

(Issue Date)

2024-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100499192>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100499192>



兵庫県立歴史博物館特別展 「首里城と琉球王国」を観覧して

森元 純一

一

初めての沖縄訪問は三〇年ほど前、一九九〇年代の半ばくらいであったと記憶している。

大学時代のゼミの先生とともに、沖縄本島へ一週間ほどの古文書調査の旅であった。かなり前のことにはなるが、見るもの、聞くこと、そのすべてが新鮮でかなり衝撃を受けたことを、よく覚えている。街路の石敢當、屋根の上のシーサー、古文書を開くと「筑登之」「親雲上」といった聞き慣れない言葉、などなど数え上げればきりが無い。

なかでも、とくに印象的だったのが今帰仁城である。当時は世界遺産になる前のことなので、今ほど整備されていな

かった（数年前に沖縄を再訪した際には見学用にきれいに整備されていた）。眼下に広がる青く美しい海と草原のなかに現存する石垣を感慨深く眺めていると、地元の方が城内にある小さな祠にお参りに来られていた。これに驚いた。支配者がいた城跡がそのまま祈りの対象になっている、という違和感を感じたためである。沖縄という地の王権の特質を垣間見たような気がしたものであるが、もちろん、これは私の勝手な印象である。

このように思い出を連ねてみたが、私自身は沖縄の歴史を専門的に学んだことはない。しかしながら、それ以来沖縄という地は、私にとって何かしら「考える」ことへといざなう場所であり続けている。王権、王国、信仰、民俗など、沖縄についての文献を折に触れて読むたびに、さまざま「考え」



開館 40 周年／兵庫・沖縄友
愛提携 50 周年記念特別展
「首里城と琉球王国」

会期 2024 年 3 月 16 日(土)
～ 5 月 12 日(日)

会場 兵庫県立歴史博物館

が頭のなかを巡るのである。価値観を揺さぶられ試されている気持ちになる。今回の特別展観覧も、動機といえば何かしら価値観を揺さぶられるのではないかという期待である。そして、結果はやはり期待通りであった。

そこで以下、展示評というよりはむしろ私的感想や特別展（および図録）からの「学び」にはなってしまうが、簡単に述べてみたい。

二

特別展は、兵庫県立歴史博物館の「開館四〇周年／兵庫・沖縄友愛提携五〇周年記念」事業として、「首里城と琉球王国」と題している。展示は四部構成。列挙してみると、第一部「首里城と琉球王国の歴史」、第二部「琉球王国の美術工芸」、第三部「琉球の民俗」、第四部「歴史文化の記録・復興・継承」となる。一読してわかるように、テーマはとても幅広く、しかも網羅的である。しかしながら個々の内容はとても充実していた。兵庫県は姫路の地で、ここまで沖縄を感じるとは、正直思っていなかった。たとえば「首里城と琉球王国の歴史」というテーマだけでも、十分に充実した内容になっ

たはずである。とはいえ、観覧しているうちに、第一部から第四部を通底する鍵があるように感じた。

その鍵とは何か。そこで、まずは簡単に展示を紹介してみよう。

第一部は「首里城と琉球王国の歴史」。首里城をメインとしながらも、琉球の歴史や政治の仕組みなどを展示する。城跡などからの出土物に始まり、琉球王国の成立、島津氏による侵攻、首里城の紹介や政治の仕組み、中国や日本（大和）との関係、そして幕末・明治へと進む。九州などで製作された滑石性石鍋、中国陶磁器、沖縄製ではあるが大和系の意匠を有した瓦、高麗系瓦などは、琉球列島が海の交易を介して形成された文化圏であったことを示している。まさに、琉球文化の複合性に注目した展示であった。また、首里城を軸としつつも、官僚制のあり方についての展示内容も詳細で興味深かった。

付言しておく、個人的には、第一部と第二部の間にあった、姫路出身の郷土史家である高橋秀吉の日記の展示に目を奪われた。「数ミリ程度の細かい字」でびっしり書かれており、開かれていた展示箇所には、竜田紡績に沖縄県から来ていた女子挺身隊の終戦時の様子が記されているという。あまりに

細かいのでケース越しではきちんとは読み取れなかったものの、記録者の観察力や叙述力、そしてそこに趣味であったという写真が加わることで、当時の様子を詳細に現前させる力があることを実感した。

続く第二部は「琉球王国の美術工芸」である。絵画・染織・ガラス工芸・やきもの（湧田焼・壺屋焼）・漆器などが並ぶ。中国や日本との交易のなかで基礎ができあがり、日本の幕藩体制に組み込まれたあとには、王府主導で生産体制が整備されたことを紹介し、また、その中心に「貝摺奉行所」の存在があったことを指摘する。注目したいのは「貝摺奉行所」で、たとえば中国絵画からの学びが、薩摩藩主や京都の公家などへの贈答品とつながったという。琉球文化形成は国家主導という重要な側面を持つことに気づかされた。

第三部は「琉球の民俗」として、来訪神・厨子甕・魔除け・民具などが並ぶ。沖縄に豊かな民俗文化があることは周知であるが、「御嶽」ですらが琉球王府によって統一的に用いられるようになった呼称であるとの指摘があり、新鮮であった。さらに、間得大君やノロも首里王府によって任命されており、祭祀道具も下賜されたとのこと。展示には、ノロの辞令書や王府より下賜された神扇があった。一般的に近代国家

のイメージを思い浮かべると、国家と民俗は対立するようにも思うが、琉球王国では間得大君を頂点とした王府の神女・祭祀制度が王のもとで整備されたと知ると、国家と民俗の関係性について改めて考えさせられた。

雑感にはなるが、個人的には藻算の展示が興味深かった。すぐに南米インカ帝国でよく知られるキープという数量記録法の結縄を思い出したからである。単なる印象で恐縮ではあるが、文字文化が浸透していた琉球王国の根底に、文字を持たなかったインカの文化との共通性を発見し、逆に琉球文化の奥の深さを垣間見た気がした。

第四部は「歴史文化の記録・復興・継承」である。琉球王国が解体し「王侯時代の文化を維持する社会的基盤が崩壊」したあと、大正期に沖縄にやって来た鎌倉芳太郎の残した詳細な記録や写真、新たな展開を見せる大正・昭和期の工芸品そして首里城の復元についての展示が並ぶ。今回、ほとんど初めて鎌倉芳太郎の存在を知り、その記録・スケッチ・写真の数々に驚かされた。とくに沖縄の場合、沖縄戦で多くの古文書や美術工芸品、建造物が失われたことを鑑みると、鎌倉芳太郎の記録の価値は計り知れない。首里城復元事業ほかの重要な「手がかり」になっているというのも興味深かった。

三

このように簡単に紹介しただけでも、今回の特別展が網羅的であることが知れよう。しかし、それぞれのテーマが個々で完結していないことは、展示紹介でも少し触れておいたように、文面からだけでも感じ取ることができるのではなからうか。この点について、以下二つほどにまとめて考えてみたい。

まず、政治と官僚制の問題である。首里城における琉球王国の政治は、琉球王国が有する官僚制を軸に展開していた。この官僚制が、第一部から第二部・第三部へと続く展示の鍵になっていると考えた。すなわち、王権が、首里城という建造物や美術、工芸品、さらには民俗の世界をも官僚制のなかに取り込んでいたことを意味する。もちろん、同時期の江戸幕府にもそのような傾向はあるが、ここでは王権が幅広い分野で果たした中心性に注目したい。とくに、それは民俗の分野で顕著ではなからうか。

もちろん、琉球文化が、国の成立以前より海の交易を介したそもそも複合的に成立していた文化圏で、さらに中国や日本（大和）というように交易範囲を広げていくことで、琉球

王国独自の文化が形成されていったことは、今回の展示でも改めて確認することができる。その文脈では国家が美術や工芸品を管理し交易品とすることも納得である。しかしながら、さらに、聞得大君を頂点とする神女・祭祀制度の構築により、ノロに対しても辞令書を発行して管理し、御獄ですら名を統一することで掌握している。つまり、琉球王国では、国家と民俗が対立せず共存していることを実感した。むしろ琉球王国の場合、その関係が濃いことこそが特色であり、それが総じて琉球文化を形成しているのではないか。たとえば、のちには抑圧されたものの、王府によつて重宝されていた占い師「時（トキ）」が用いていたテキスト「時双紙」（鎌倉芳太郎書写）が展示しており、王府と占いの関係性について知れる。もちろん、のちに抑圧されたことが示しているように、沖縄の民俗も王国の成立・展開とともに必然的に変容していき、現在観察できる民俗も王国の編成を受けて変容したあとのものであろう。であるが故に、今回の展示からは改めて琉球文化の複雑さを目の当たりにした気がする。なお、筆者の勉強不足につき、なぜ、どのようにに神女・祭祀制度が構築されていったのか、具体的展開過程は十分に理解していない。今後、改めて学んでいきたいと思う。

もう一つは、文字史料が大きな役割を果たしていることである。結局のところ、第一部で紹介されていた文字史料が、平成そして令和の首里城復元において大きな役割を果たしていた。これらは何より残された史料により可能となっていたのである。つまりは首里城の復元にあたっては、史料によってきちんと復元する意図があったということである。九〇年代に沖縄を訪れた筆者は、この点に考えが至らなかった。単なる模造品ではなく、まるで文化財（建造物）の保存修理のような慎重さをもって復元されていることを知り、ある意味感銘を受けた。

それとともに、歴史の流れのなかで何度となく危機を迎えた沖縄の文化にとつて、危機感を抱いた鎌倉芳太郎のような人物が文字やスケッチ（あるいは写真）として記録したことで、文化の復興が可能になっていた点も注目される。第二部の展示にも模造復元された染織品が展示されていた。これらは「琉球王国文化遺産集積・再興事業」において作られたもののこと。このような事業も、鎌倉などの記録が大きな役割を担っていたそうである。こうした危機感を背景にした鎌倉や柳宗悦らの記録により、大正から昭和に工芸が盛んとなったことも興味深い。琉球王国や沖縄の文化、そして現在

に生きる私たちにとつても、文字史料としての記録が重要であることが見て取れる。

四

ところで、今回の特別展が首里城の復元を背景にもっていることは言を俟たない。実は、筆者が展示を観覧したのは令和六年三月十六日（土）のことである。それは館長トークイベント「首里城復元のあゆみ／平成から令和へ」に参加したかったためである。出演は、藪田貫館長のほか、元国営沖縄記念公園事務所長で元兵庫県参与の石原憲一郎さん、そして本来は首里城復元に関わる高良倉吉さんの参加予定であったが、欠席のため沖縄県立博物館・美術館の里井洋一館長が加わっていた。

その際強く印象に残ったのは、首里城の復元が、前述したように、まるで重要文化財の保存修理のように、徹底した調査の上になされていたという事実である。欠席された高良倉吉さんは、かつて首里城の復元に際して、「わたしが何千冊もの本を書き、何万回もの講演を行なって琉球史の存在意義をアピールしたとしても、首里城のアピール力には遠く及ば

ない」との思いを吐露している（高良倉吉『琉球王国』）。高倉さんはまた、今回の展示図録に一文を寄せているが、そこに首里城復興事業の意味として「失われた琉球王国時代の遺産を可能な限り甦らすことである。沖縄という地域に刻まれた「かたち」を回復することである」として、やはり「かたち」にこだわりを見せている。首里城が文字史料などの記録をもとに「かたち」にこだわり復元されてきたという事実は、沖縄の文化が幾度となく途切れそうになったことや、そのことに危機感を持った人々の記録作成にいたる、そういった歴史を象徴しているような氣にさえなってくる。

今回の特別を通して、改めて沖縄の歴史や文化について思いを馳せ、とくに沖縄の民俗についても認識を改めることができた。さらには、復元・復興の意味とは何か、文化財の意義とは何か、について考えさせられた有意義な時間となった。個人的には、今回の展示および沖縄で進行しているプロジェクトが、一つの総括的意味合いを持ち、沖縄の文化が、その歴史とともに未来へと繋がるだけではなく、さらに創造・充実していくことを願ってやまない。